



## 「富嶽百景」へのオマージュ



東京大学 名誉教授

鹿取廣人 (かとり ひろと)

1928年、埼玉県六辻村で出生。1937年、日独伊防共協定締結記念に親善として独伊両国に子どもの絵を贈る事業を某製菓会社が企画、その特別賞をたまたま受賞。その後絵への興味を失い専ら虫取りに熱中。大学入学後は中学時代の仲間と山登りを楽しむ。絵への復活はその山登りの最中だったようだ。

かの葛飾北斎は、江戸後期に富嶽三十六景を描いている。なにも北斎をつぐ意図はもうとうないが、いま私は、富士山を描くのに凝っている。昨年秋の末頃から現在までに約30数枚の富士の絵を描いた。ただし大きさはポストカード、画材は色鉛筆、しかも描く位置はつねに我が家から。成城学園近くの国分寺崖線のすぐ下、築39年の老朽マンションからは、秋ともなれば大山から蛭ヶ岳までの丹沢山塊を従えた富士が約85キロさきに白銀に輝く。同じ位置からでも、その日の雲の位置・流れ・大気の状態や、時刻などによって面影が刻々変化する。いつかは私の富士も、その数が百を超えるときがあるかもしれない。そういえば北斎にも富嶽百景があるそうだ。

太宰治は『富嶽百景』の冒頭で、まじめに！陸軍の測量図（多分5万分の1地図）を用いて富士の頂角が東西124度、南北117度、のろ臭く広がっているとしている。実際、望遠レンズで写してみると、平べったいことに驚く。ちなみに私の写真での頂角は約120度、私の描いた富士は、およそ85度～105度である。

北斎の富士の頂角は、太宰によると30度とのこと（おそらく「富嶽百景：凱風快晴」の富士）。多くの現代の画家もその頂角を過小に描く（実際にそう見えている？富士錯視）。また片岡珠子さんのようにデフォルメして描く。そのまま描くと平凡、陳腐な絵になってしまうがちだ。しかしそれ

ゆえに、われわれの想いを受けとめてくれる山、素人にとって描きがいのある山なのだ。

ポストカードのスケッチブックは、私の愛用する画材だ。持ち運びに便利、機動性がある。東大を定年になってからは、大山や小田急沿線の丹沢前衛の山々、奥高尾や中央線沿線の山々など、低山を独りでゆっくり歩くことが楽しくなった。ポストカードのスケッチブックをズボンの後ろポケットに、携帯用のWinsor & Newtonの絵の具（発色はすばらしい。ただし私はれっきとした色弱、石原式検査表で完全に引っかかる。パネルD15では正常）と水ペンのセットをザック上のタッシュに載せていく。都心に雪の降った日にはアイゼンをしのばせて、ちょっぴり雪山の感覚を味わいながら、雪景色を描く。こうした小さなスケッチも今や箱いっぱいになっている。

帝京大学も定年になり、絵を習おうと決心。はじめ油彩画をと考えたが、住宅事情からパステル画を習うことにした。先生は立軌会の柴田賢治郎さん、始めてみるとパステル画もそんなに簡単ではないし、面白い。油彩と違ってはじめのひと塗りが結果に影響しかねない。教室終了後、先生を交えて仲間たちと一杯飲むのがまた楽しみだった。その際に、中高年の素人絵仲間14、5人の「洋梨の会」へ入会を誘われた。1年に1回、なんと銀座のとある会場の展示会に私も出展することになった。この展示会も今年で17回目になる。

年をとると夜の教室はしんどい。そこで昼の緒方洪章先生の基礎デッサンに妻と一緒に通うことにした。ここでのまさに初体験が、クロッキーだ。5分間、裸婦が一定の姿勢をとる。その間になんとか仕上げるわけだ。残念ながら、これは妻の方が腕を上げている。

70歳を超えてスイスに何度か旅行した。そこで憧れの山々、マッターホルン、アイガー、グランドジョラスにお目見えする。二人、トレッキングをしながらスケッチを楽しんだが、後でパステル、水彩、さらに新たに習ったペン画で比較的大きな作品を何点か描き、評判はともかく、「洋梨の会展」に出展した。それらの絵は、まさに自画自賛、自宅に掲げてある。

最近になって外国志向を反省、かつて登った日本の山々をしっかりと描くべきだと思い、その参考にと昔のスケッチブックを引っ張り出した。しかしいざいざ、山小屋、テントでのいたずら書きしか残っていない。もちろん写真も存在していない。他人が撮った風景写真と記憶・イマジネーションを頼りに思い出の鹿島槍を描いたが、なんと薄っぺらな、存在感のない鹿島槍になってしまった。

ふと窓の外に眼をやると、光り輝く富士が私に語りかけてくるではないか。そうだ、これからは富士を描こう。しかし、富士はいつも機嫌がよいとは限らない。春、夏にはなかなかその姿をかいま見せてはくれない。私の富嶽百景の完成は、いつになるのだろうか？